スクリーニング検査における大腸ファイバーの有害事象

An Estimate of Severe Harms Due to Screening Colonoscopy:

A Systematic Review

 

大腸がんの発生頻度が増加傾向です。大腸がん検診では便潜血に続いて大腸ファイバーがスクリーニングとして行われています。

大腸ファイバーの精度に関してブログでも紹介しましたが、その副作用、危険性についての論文が出ています。

１）2002年1月1日から2022年4月1日までのスクリーニング検査としての大腸ファイバーの有害事象について調べています。

　　主要転帰は、検査後の30日以内での重篤な出血と穿孔です。

　　1951論文が対象となり、94論文が全文を調べています。最終的に6研究が採用され467,139例のスクリーニングの大腸ファイバー検査が統計として調査されました。

２）結果

　　重篤な出血は、16.4～36.18例/10,000例でした。

　　穿孔は、7.62～8.50例/10,000例でした。

　　出血はスクリーニング検査時のポリープ切除の際に主に起きています。

３）考察

　　有害事象が以前のUSPSTFの報告よりも本論文の方の高頻度ですが、経過観察期間が30日と長く設定しているためとしています。

　　重大な副反応は当然ながら被験者が高齢化するほどに高くなっています。

４）大腸ファイバーの事故を防ぐためにも適切に検討し、overuseを避ける事が必要としています。

私見）

　本院でも大腸がんを早期に発見できていると自負していますが、適切な検査間隔が必要です。しかし残念ながら現実は検査間隔が長すぎてしまう例が多い印象です。